西海市大瀬戸町雪浦地区

15

NPO法人 雪浦あんばんね

人　口	1061人
世帯数	498世帯
設　立	平成27年5月

（令和３年１０月末現在）

地域の現状と課題

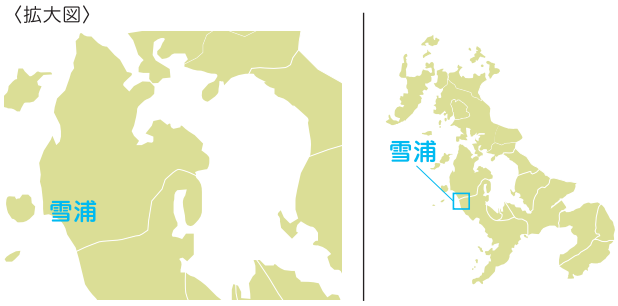
西彼杵半島の北部、西海市大瀬戸町の南西部に位置する雪浦地区は、長崎と佐世保両市内から車で１時間ほどの集落です。山には渓流や滝があり、それらの清流が雪浦川に集まって、地区の中心を流れます。河口付近では釣りやカヤックが楽しめ、西方の角力灘には美しい夕日が沈む。豊かな自然がコンパクトにそろっているのが魅力です。

住民はかつて、川や森林などの資源を活用して農業や炭焼きなどで生計を立てていましたが、今ではその多くが他の仕事と両立しています。令和３年１０月末現在の人口は１０６１人で、ここ１０年で２８０人減りました。人口全体に占める６５歳以上の高齢者の割合（高齢化率）は増加傾向にあり、平成２７年時点で４０％を超えています。過疎化や少子高齢化が進んでいる状況は否めません。

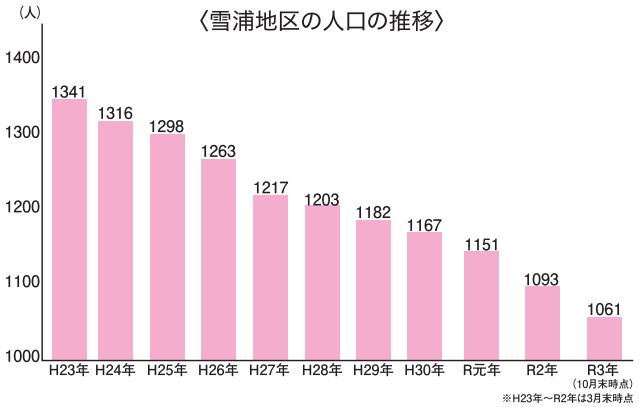
集落の存続が危惧される中、地域の資源を活かして活性化を図ろうと、住民を中心とした実行委員会主催のまち歩きイベント「雪浦ウィーク」が平成１１年に始まりました。訪れる側、迎える側が共に楽しめ、顔の見える交流が好評で、イベントは徐々に拡大。平成２５年に総務省・全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞しました。

これをきっかけに、活動を発展させてさらなる地域おこしにつなげようと、平成２７年にNPO法人「雪浦あんばんね」を設立しました。「あんばんね」は雪浦の方言で「遊んでいきませんか」という意味です。

〈拡大図〉

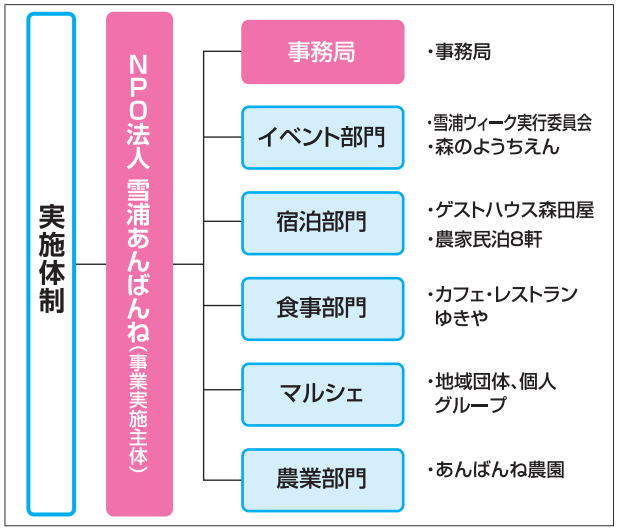


〈雪浦地区の人口の推移〉



雪浦の交流拠点を目指すゲストハウス「森田屋」＝令和3年12月、西海市大瀬戸町

海、山、川に恵まれた雪浦地区



雪浦あんばんねの実施体制図

空き店舗を改装してオープンした「ゆきや」＝平成27年4月、西海市大瀬戸町

現在の主な活動内容

〈運営上の課題と克服手法〉

雪浦あんばんねは、**都市部と農村部の交流促進**を目的に、雪浦ウィーク実行委員会を中心とする「イベント部門」をはじめ、5部門で事業を展開。赤ちゃんからお年寄りまでが心豊かに暮らせる「すてきな田舎」を目指して、活動に取り組んでいます。

平成27年に**総務省の過疎地域活性化事業補助金**を受けて、**空き店舗をリノベーションしたカフェ・レストラン「ゆきや」**を開設。長崎県の小さな楽園づくり交付金などを活用して、平成28年に耕作放棄地を開墾した「あんばんね農業」、平成30年には**空き家を改装したゲストハウス「森田屋」**を始めました。地区内外のこだわりの商品を販売するマルシェも、定期的に開催しており「地域再生大賞」の優秀賞など各賞を受賞しています。

当初は「地域のため、地域に還元を」という意図が住民に伝わらず、協力を得る難しさがありました。活動を地域から分離しないように、例えば、森田屋を宿泊施設だけではなく、地域の人たちも同窓会などで使えるようにしました。**地域と旅行者との交流の場**になればと、時にはビアホールとしても開放。**地域内でお金が回る仕組みづくり**をしています。

〈雪浦ウィークの取組〉

雪浦の魅力を広く発信しようと始めた地域回遊型のイベントで、住民を中心とした実行委員会主催で開催。毎年ゴールデンウイークに、地区で活動する人たちの工房やアトリエなどを開放し、郷土料理の提供や絵画、陶芸の展示などを通じて、地区外から訪れる人たちと交流しています。

平成11年のスタート時は、出店が13店舗でしたが、20年を経て約50店舗に増え、来場者も1万人を超えました。路地裏を歩いたり、地元の人たちと話したりして雪浦のファンになる人は多く、イベント後にほぼ毎年、移住相談を受けます。地域を盛り上げるために**「自分たちでできることをしよう」**と始めたイベントが、結果

雪浦ウィークでにぎわう地区の様子＝令和元年5月、西海市大瀬戸町

令和2年に開催予定だった雪浦ウィークのマップ

的に移住者を増やすことにつながりました。ここ２０年余りで、Iターン者約８０人が移住してきました。

ただ、新型コロナウイルスの影響を受けて、令和２年は開催を中止。令和３年もまち歩きは取りやめましたが、出店を予定していた店舗や、雪浦あんばんねの取組などをインターネット上で紹介しました。地区外の人たちとじかに触れ合うことはできませんでしたが、多くの若者から反応があり、予想以上に広く発信する形となりました。

今後は、期間限定ではなく、１カ月、年間でも雪浦を楽しんでもらえるような案内地図をつくり「雪浦マンス＆イヤー」と題した〝拡大版〟を目指していきます。

雪浦ウィークの来場者に演奏を披露する雪浦小学校の子どもたち＝平成30年5月、西海市大瀬戸町

POINT

- アイデアを絞って地域の魅力を発信
- 地域のファン、移住者が増加
- 今後は年間を通して楽しめる工夫を

INTERVIEW

雪浦がずっと続くように

雪浦あんばんね事務局
山田　千晶さん

雪浦の自然や歴史、人の優しさに引かれ、ここで子育てがしたいと思って平成１５年に関東から移住してきました。私が好きになった雪浦がずっと存続してほしいという思いがあって、地域の魅力をアピールできるイベントを企画したり、発信したりしています。

訪れる人にとってはもちろんですが、**地元の人が「ここに住んでいて良かった」「あんばんねがあって良かった」と思ってもらえる地域**にしたいです。ただ、まちおこしの活動は、地元の人に積極的に参加してもらうのが難しい。活動が孤立しないように、史跡巡りや星空コンサートなど、**地域の人も参加したくなるようなイベントを通じて**、関わりを持ってもらえるよう心掛けています。

雪浦で人が生き、住み続けられる地域であるための活動ということ、そして、最初のころのワクワクドキドキの気持ちを忘れず、一歩一歩、力を込めて歩んでいきたいです。

行政からの支援

様々な事業に各種補助金や交付金を積極的に活用しており、令和２年からは長崎県農林部が取り組んでいる農山村集落への「移住体験事業」（お試し移住体験）による支援を受けています。受け入れ側のスタッフがボランティアで行ってきた移住希望者への地域案内などに謝金が出て、移住希望者もその集落の農泊施設で宿泊した場合に宿泊費の補助をもらえるため、受け入れ側も対応しやすく、移住希望者も相談しやすくなりました。

移住体験ツアーで集落を散策する参加者ら＝令和元年8月、西海市大瀬戸町

今後の課題・展望

活動を次の世代でも継続させていくために、**事業として仕事ができる**地域にする可能性を探っています。例えば、森田屋は宿泊施設ですが、スタッフを１人しか雇用できずに人手が足りておらず、他のスタッフがボランティアで運営に加わっていて、このままでは限界があります。事業のそれぞれが、活動資金をつくれるような仕組みの構築が必要と考えています。

そこで、雪浦あんばんねを事務局に、平成３０年に新しい地域協議会として「雪浦ニューツーリズム協議会」を設立。みんなで**次のステップを踏もうと挑戦**しています。各種補助金や交付金を積極的に活用しながら、これまでの「地域づくり」に加え、今後は「観光振興」にも力を入れる方針です。

活動について話し合う雪浦あんばんねのメンバー＝平成27年4月、西海市大瀬戸町

INTERVIEW

未来につなぐ成功事例を

雪浦あんばんね
理事長
渡辺　督郎さん

長崎県外で社会人になった後、青年海外協力隊として途上国に行きました。活動をしていると、生まれ故郷の雪浦も過疎化していると気付き、何かできることはないかと思って３０歳の時にUターン。雪浦ウィークを発案しました。

雪浦ウィークは雪浦小学校の児童も学校行事として参加して、賑わう地元の姿を感じます。ある児童に「雪浦って活性化しているんですよね」と質問されて「活性化」という言葉を知っていることに感心しました。雪浦ウィークを始めて２０年余り。当時に比べると、確かに地域は活性化していると思います。**未来を担う子どもたちのためにも、やって良かった**です。

「行政の補助金や交付金が終わったら終了」というプロジェクトは多いですが、うちはそうしたくない。無駄にならないように可能な限り活用して、**成功事例をつくっていく気持ち**で続けています。

まとめ

① アイデアを絞って地域の魅力を発信
② 地域のファン、移住者が増加
③ 地区内外の交流がいい循環を生む
④ 今後は年間を通して楽しめる工夫を
⑤ 地域内でお金が回る仕組みづくり
⑥ リーダーの熱意と行動力が重要

取材を経て

なぜ雪浦に人が集まってくるのか。事務局の山田千晶さんは「理事長の存在が大きい」と、自らが移住を決めた際に熱心に世話を焼いてもらい、雪浦が〝特別な地域〟になったことを振り返ります。前進を続けられる現場には、必ずいいリーダーが存在します。理事長が持つ古里のまちづくりへの**熱意と行動力**が、求心力になっているのだと思います。

そして、地域の外から来た人が、地元の人にとっては「あるのが当たり前」だった地域の良さに気付かせてくれるなど、**地区内外の交流がいい循環**を生んでいます。まちづくりは、自発的に取り組む意欲のある人が地域にどれだけ存在するかがカギとなります。その意欲のある地元の人たちを増やす工夫を続けて、さらなる発展につなげてほしいです。